

読書通信



No. 114

① 中国大使を退任してすぐ執筆した『北京烈日』（文藝春秋）に続いて、中国の直面する諸問題により詳細に切り込み、多面的な視点から日中関係への提言を行ったのが丹羽宇一郎『中国の大問題』（PHP新書、864円）である。巨大な人口、経済、地方、少数民族という四つの大問題について厳しい指摘があり、それを受けて日中関係、安全保障、そして日本自体の大問題に持論を展開している。

中国の言動には奢りが色濃くなっているという指摘をはじめ、ほとんどが適切、的確な解説

批判、提言と思われるが、中国を侮（あなご）つてはいけない、中国とうまく付き合っていくべきだという著者のごくまっとうな立場が即、親中派、媚中派などというレッテル張りの対象となる日本の風潮は、むしろ自信のなさの裏返しなのではないか。互いを尊重し、言うべきことは言う、批判する前に相手の立場に立ってみる、石橋湛山氏が生前言っていたことほど、今の日中関係に求められていることはない。親中反中を超えて多くの人に読んでもらいたい良書である。

② 内閣の顔、首相の側近中の側近、危機管理の要。官房長官はいくつもの顔を持つ、ある意味で首相以上に重要な存在だ。記者会見での表情や発言で国民は内閣を、世界は日本を判断してしまう。安倍内閣が第一次とは様変わりに安

定しているのはもっぱら菅義偉氏のおかげらしい（前回は当初、お友達の塩崎恭久氏だった）。

星浩「官房長官」（朝日新聞出版、1296円）は官房長官の仕事や勘どころを知るうえで最適な一冊である。首相との距離感、官房長官を支える組織、官房機密費という巨額のカネなどを具体的に説明していて、大いに腑に落ちる。戦後の官房長官ベストスリーと、小沢一郎など向かない政治家の名も面白い。豊富なエピソードも含めさすがベテラン記者の筆致である。

③ これからの世界と日本、そして株価はどうなる、とくれば今井激『2014-2015日本経済逆転のシナリオ』（フォレスト出版、1728円）がお勧めだ。百戦錬磨のエコノミストが日本経済の見通しを語り、アメリカはシェ

ール革命なのに株価は2年間、上がらないとの託宣である。タンス預金の動員、海洋資源開発の本格化、オリパラ効果が日本の明るい理由だとか、中国は不安材料いっぱい、第3次世界大戦」で今度こそドイツが勝つEUの話とか、興味津々の話が平易に述べられる。

④ 東日本大震災がらみのドキュメントは傑作ぞろいだが、佐々涼子「紙つなげ！彼らが本の紙を造っている」（早川書房、1620円）も良かった。出版用の紙で日本一の日本製紙（石巻工場が津波に飲み込まれてから再起するまでの激動の半年間を追って見事な構成と描出である。日本製紙野球部が都市対抗へ劇的な復活を遂げるまでと工場再生の複雑劇は「ルーズヴェルト・ゲーム」さながら、感情移入も楽しめる。（純）